

2021. 10. 31. 主日礼拝説教
聖書：マルコによる福音書2章1～12節
『命の言葉を保ちなさい』

本日の2章1節から3章6節までは「論争物語集」と呼ばれます。ここではユダヤ教の権威との論争の中で、マルコは「イエスとは誰か」というテーマを順繰りにひもといて行きます。

1～5節、11～12節は元来一つの治癒奇跡物語でした。そこにマルコは5b～10節の「罪を赦す権威に関する物語」を挿入して本日の物語全体を完成させました。この編集作業によって全体は論争物語の性格を帯び、奇跡物語というこれまで一人歩きしていた伝承が、イエスが罪を赦す権威を有することへの证明材料へと変えられて行ったのです。

さて、ここに登場する四人の男と中風の方は屋根をはがしてまでしてイエスと出会います。この行為は幼稚園や子どもの教会では喝采をもって受け入れられるでしょうが、はっきりいってメチャクチャな行為です。こんな破れかぶれの迷惑な行為は聖書の中にもあまり登場は致しません。しかし、マルコは元来の伝承通りにこの破れた行為を、まるで暖かく迎え入れるような丁重さで受け入れるかのように描き出します。マルコの手法は、いつも信仰が奇跡物語に先行するのです。言い換えれば、今この時この場でこの病人にとっての慰めとは何かを問題にされるイエスを描き出すのです。

旧約の昔から病は罪の結果として広く一般に考えられていました。病を癒すと罪を赦すとは同義語でありワンセットなのです。ですから、病を負う者は自業自得として救いの範疇から放り出されていたのです。同情の余地なしというところだったのです。「子よ、あなたの罪は赦される」(5)というイエスの宣言は現在時制で書かれます。つまり、いつかそのうちとかまた日を改めてとかいうおためごかしの祈りや形だけの同情なんかではなく、「今・この時・すぐに」ということなのです。

屋根を破ってまでもイエスとの向き合いにひたすら突き進んだのは四人の男と中風の方です。それは厳しい問いかけでした。しかし、イエスはその問い

に「すぐに」応えられるのです。

このようにマルコの描くイエスの眼差しとは徹底して「個別化」の方向に進みます。それは問いを「一般化」することなく、「わたし」と「あなた」という関係の中で生き生きと応答する関係があらわにされてゆくのです。「いったいだれが、罪を赦すことができるだろうか」などと事柄をいつも一般化して論評する律法学者には、屋根をはがしてまでする行為は単に迷惑な行いとしてしか映らなかったことでしょう。そこには病者にとって何が慰めなのかという問いも、また、病者の痛みや思いなぞ知るよしもないのです。しかし、イエスは「その人」と「その場」で確かに出会うのです。

わたしたちは決してひとりでは生きてゆけません。かといって多くの人たちと交わっておればそれでよいのかといえば、そうでもないのです。というのも人はただ生きているのではなく、死に向かって生きているのであり、そして死ぬとはまったくひとりのことであるからです。政治や経済がどれほどきめ細くなされても結局ひとりの人に届かないのは、そこには交わりに届く論理はあっても、ひとりの人の死に届く論理がないからでしょう。死に怯えつつ人間を問う姿勢、ここにイエスの命の言葉があるのではないのでしょうか。